

文学的想像力と共鳴のフレーム

Literary Imagination and Frames of Resonance

内藤 千珠子
NAITO Chizuko

大妻女子大学文学部
Otsuma Women's University, Faculty of Humanities

キーワード

性暴力 植民地主義 ト라우マ ジェンダー 文学

Keywords

Sexual violence; Colonialism; Trauma; Gender; Literature

原稿受理日: 2023.2.17.

Quadrante, No.25 (2023), pp.47-51.

目次

1. ト라우マの表象と複数の傷
2. 男性化される傷
3. 共鳴のフレームとフィクション

2022年2月20日、拙著『「アイドルの国」の性暴力』（新曜社、2021年）の書評会において、ファン・ジュンリャンさん、佐藤泉さんに提題者として報告していただいた。深みのある批評的指摘をしてくださったお二人と、書評会を企画してくださった小田原琳さん、当日の議論に参加してくださったみなさんに心から感謝申し上げます。

ファン・ジュンリャンさんには、書評会での提題内容をもとに書評論文を執筆いただいたので、その批評への応答を中心に、以下、文学的想像力と共鳴のフレームについて考えたことを素描してみたい。

1. ト라우マの表象と複数の傷

拙著では、ジェンダー研究やフェミニズム研究による学術的な議論を踏まえたうえで、現代

の性暴力的なジェンダー構造が近代のナショナリズムと結託したものであることを可視化するために、「帝国的性暴力」の用語を設定した。さらに、帝国的性暴力が備えた物語の論理について、「伏字的死角」という概念をキーワードとして議論を展開した。伏字を用いた検閲システムは、日本語の言説空間に不可視の場所を創出し、伏字を通して、マジョリティの側がマイノリティを目に見えない存在、見えなくてもよい存在として扱う文化的感性を派生させた。マイノリティの傷や被傷性を利用する暴力的な構図のなかに、代理や依存の形式があることを論じたが、可視化される傷と不可視の傷の関係性をめぐる議論については、トラウマ研究や軍事主義とジェンダーを主題とした視点を参照しつつ、さらに深めていく必要があると考えている。

では、ファン・ジュンリャンさんの書評論文で指摘のあった、「女性身体はその被傷性でつながっている一方で、その被傷性が示す具体的な「傷」の様相は、重なる時もあれば異なることも必ずある」という観点と、拙著で議論した横田創『残念な乳首』（『落としもの』書肆汽水域、



2018年)における、娘が母の裸体を目撃した体験を「トラウマ」と呼ぶ出来事性についての読解を出発点として、目に見えにくく、語りにくいトラウマの問題について改めて考えてみたい。『残念な乳首』では、語り手の「わたし」と、唯一無二の存在である「妙子」という女性との関係性が中心に置かれるが、出会いから妙子を喪失してしまうまでの短い過去の時間を回想する「わたし」は、過ぎ去った出来事を現在進行形の語りによって読者に伝えていく。「わたし」にとって理想的な身体をもった妙子は、顔にコンプレックスがあり、それを傷として語る。「わたし」の傷は、妙子の傷とは異なるが、「わたし」は妙子に傷を語らせることで、「残念な乳首」と名指された自分自身の傷を肩代わりさせてしまう。グラビアアイドルとして身体を消費されることを自ら選択してきた「わたし」は、帝國的性暴力の宛先となる経験をもちながら、別の誰かを暴力の対象として消費する行為を、最も大切な相手に対して遂行してしまった語り手である。

小説テキストにおける「残念」という言葉は複数的な意味をもつが、かけがえのない存在を毀損してしまったその失錯を後悔する情動が、「残念」の言葉には含みもたれているだろう。無念の残る失錯を悔いる「わたし」は、語りの現在時にあって、過去の「わたし」といまの「わたし」に分裂しながら交錯し、喪失を悔やむ現在時の情動が過去の出来事に重ねづけられる。いまはもう目の前から消えてしまった彼女の固有名を、「わたし」は何度も呼び続ける。「妙子」という名前を繰り返し呼ばずにはいられないその情動は、過去を現在に吸引する。語ることは、原理的にいえば、過去を現在の場所に呼び戻そうとする行為にほかならず、過去を完結させず未完の状態に留めおく小説の語りは、フィクションの時空のなかに、いまとは違う未来を派生させずにはいないだろう。

こうした小説の語りの力学を考えると、母親

の身体を「過度に裸体」と表現し、そのおぞましさに衝撃を受け、過去の経験を「トラウマ」という言葉で読者に伝える「わたし」は、妙子を知るよりもさらに昔の「わたし」を現在に呼び戻しているということになる。短篇の冒頭で示される、自らの裸体を「残念」と非難された経験を通していまの「わたし」は、母の身体と「そっくり」な「残念な乳首」を自分の身体が備えていることをはっきりと自覚している。だとすれば、「わたし」の認識のレベルというよりは、物語構造の次元で、「わたし」のトラウマが、過去を現在に出会わせる共鳴のフレームとして機能していることを、読者である私たちは批評的に析出することができるのではないか。すなわち、生身の女性身体をおぞましいものと知覚してしまう「残念」な様式を語る語り手が、そのように語る時空を経由することで、「トラウマ」の語が吸引する出来事の断片は異なったつながり方へと転換し、小説テキストは現在を別の未来に向かって更新するのだ。

ジュンリャンさんの指摘する通り、「わたし」が母の裸体を見た過去の時点において、「母と娘の身体」は共鳴する関係にはなりえていないだろう。ジュンリャンさんの読解に連続させてテキストの論理を考察してみると、にもかかわらず、出会い損ねた過去が、流動的で不安定な現在を経由して別の意味へと膨らみ、「母と娘の身体」は共鳴の可能性に接続するように思う。さらに、それを読んだ読者の未来を、共鳴の方向へと組み変えるという批評性が、小説の言葉に埋め込まれた物語の論理として見えてくるだろう。

2. 男性化される傷

他方で、トラウマをめぐる表象の政治学を「戦争の物語」という主題において考えたとき、現代のナショナリズムを背景としたテキスト群のなかでは、戦闘に身を捧げ、生き残った男性

たちの可視的な傷が、制度の維持にとって都合なトラウマを不可視にするといった構造があるといえよう。明示された象徴的な傷は、軍事的暴力を名誉ある行為として称賛する根拠とみなされる。異性愛のロマンスを経由しつつ、女性たちがその傷を労りふたたび戦場に回帰させるとき、軍事化された男性身体の表面を彩る傷は、わかりやすい魅力へと転じていく。

軍事主義と家父長制の論理から導かれ、制度とシンクロする男性化された傷は、男性たちが経験する耐えがたい傷の現実を不可視にする効果をもっている。こうした構造に照らしてみると、「クールジャパン」という文化経済戦略について、「西洋」という「他者」の目線を内面化した結果として考察する必要があるというジュンリャンさんの指摘は、男性化された傷の問題をより広い射程をもって主題化する可能性を促すもので、触発的だ。エキゾチシズムやオリエンタリズムの延長に生じる現代日本の性差別を、トランスナショナルな視点から思考することによって、ナショナリズムとジェンダーの相関関係を明らかにしなければなるまい。

西洋という審級との関わりから、拙著で論じた「傷ついた僕たち」の物語を再検討するなら、「オタク文化」の構造に内在する、屈折した自我や自意識について、近代日本の「私小説」と関連づけて議論することができそうだ。「傷ついた私（俺・僕）」の系譜には、「日本近代文学」における王道的な男性主人公が模索する「近代的自我」の物語、父と息子の織りなす葛藤が連なっている。私小説的な空間における主人公、男性の語り手の傷を、日本型オリエンタリズムにおける男性の傷や、占領期に表象された男性の傷と重ねあわせて論じることによって、仮想された関係のなかで内側に閉じこもる世界像とその問題がみえてくる。

このような「普遍」を志向した男性中心的な権力の構図と鋭い対照を描くのが、女性やマイ

ノリティ性をもった「私」の語りをもつ、現代のオートフィクション／自伝小説だろう。#MeTooムーブメント以降の現在、研究の言語における「私」の語りも含め、物語のスタンダードを組み変える言葉の運動が出現している。わかりやすく可視化された傷の表象は、暴力装置として両義的、複数的に機能するが、「伏字的死角」の効果、暗黙の了解に支えられる定型の機能が、定型を逸脱する要素を抑圧する力学もまた、更新することは可能だろう。

3. 共鳴のフレームとフィクション

最後に、「共鳴のフレーム」というキーワードについて改めて整理してみたい。拙著で提示した「共鳴のフレーム」は、文学研究やフェミニズムの実践を通して見出される、学術的な認識や思考の枠組みを指す言葉である。直接的には、金子文子が朴烈との関係について「感化」されたのかと問われたとき、「感化」ではなく「共鳴」したのだと主張したその言葉の選択と行為の遂行に、「共鳴」をめぐる思考の契機があった。「感化」は、する側とされる側の間に上下の秩序を派生させるが、「共鳴」は、する側からも、される側からも、能動性を奪わない。金子文子が他者と生きようとする関係性のなかには、主従関係や能動と受動のポジション、どちらが先でどちらが後なのかという優劣の秩序、二元化された権力の構造を退ける選択と可能性が鮮烈に示されている。二項対立を避けるための批評理論を念頭におきつつ、金子文子の貫いた生の姿勢を思考のフレームとして定義することによって、近代の文化構造を深々と侵蝕し、社会に波及するシステムに亀裂を走らせ、学術的な言語を総合しながら、亀裂によって変化したその先の世界像を描き出すことができるのではないかという問いの設定があった。

金子文子の言葉から出発して構築しようとした「共鳴のフレーム」には、いくつか対照される

べき軸がある。第一に、ジュディス・バトラーが批判的に可視化した、現在の世界を覆う「戦争のフレーム（枠組み）」がある。あえて単純化して述べると、戦争を可能とし、他者への暴力を前提として受容する戦争のフレーム、暴力を容認する文化的感性とは別次元に、別の認識や思考のフレームをもつことが可能性としてありうることを、学術的に、ある種のわかりやすさをもって示す必要があると考えたのだった。

そのような思考の実践は、すでに先行する研究の言語のなかに積み重ねられてきたものだ。とはいえ、既存の制度や規範を批判する形式を備えた学術的な語り方は、規範や権力、大きな物語がもつわかりやすさに比べると、否定形で定義されたり、複雑だったり、難解だったり、留保がつけられがちだといえる。もちろん、権力を帯びた規範を批判的に考察する場合には、説得力をもった議論が必要になるので、繊細な複雑さを帯びた語り方になるのは、当然のことである。こうした前提を踏まえた上で、そこから出発して、選択しうる別様の様式がありうることを、丁寧に留保しながら否定形で表現するのではなく、肯定形で明示的に定義するために、文学研究やフェミニズムのなかで実践されてきたスタイルを具体的に「共鳴のフレーム」と名指してみたのである。

第二に、共鳴のフレームは、「物語の定型」との対照を示す。これまで、私自身が継続して思考してきたのは、物語の定型が暴力として作動し、差別の論理が行き渡った近現代の言説空間についてである。物語の定型は、世界を二元化し、人々を一つの意味の型のなかに閉じ込める。かつては、「物語の暗殺」という比喩的な表現を用いて、物語の定型が備えた暴力を批評することを重ねてきたが、より鮮明に、物語の定型に横領されるのとは別次元の認識や想像力の可能性を叙述するために、共鳴のフレームという言葉を設定した。定型を経由し

てしまうと、思考は反復の先で同じ結末に行き至ることが予定されるが、共鳴のフレームを経由して思考し想像することは、反復したその先に、複数の選択肢を現出させるはずだということを示したかった。

ファン・ジュンリャンさんからは、「暴力から離れることも、人の傷の外部にいることもできないのではなかろうか」という根源的な問いかけがあった。この問いは、紛れもない現実を言い当てたものにほかなるまい。批判的な指摘から拙著に立ち戻って述べるなら、現象や制度としての暴力と、マスター・ナラティヴとなっている暴力的な思考様式や物語の暴力のレベルとを、厳密に区別しながら議論を組み立てるべきであったように思う。論じようとしたのは、暴力という現象に構造的に連続することから逃れることはできないが、暴力を容認して積極的に延命させる思考や感性のフレーム、そして物語の定型が醸成する暴力から隔たるというフィクショナルな身振りが、暴力の原理をもとに差別を行き渡らせた世界の論理を異化させるための契機になりうるのではないかということである。

文学の言葉は、フィクションを含む様式であるがゆえに、まだ実現していないが、この先実現するかもしれない未来を、架空のものとして言語化することができる。また、フィクションであるからこそ、客観的な事実としては、過去として完結してしまったようにみえるであろう出来事や歴史を、現在進行形の言葉で現実のなかに招き入れることができる。二元化する暴力や、一つの意味に決定づけてしまう暴力に統御された世界ではなく、複数性が並び立ち、自分ではないものとのつながりを実感できる世界は、フィクションを含む文学の言語によって確かな手触りを得る。文学研究の言葉には、それを伝達するための使命があるだろう。もちろん、現実を異化させるその契機は瑣少で淡く、おぼ

つかない。それでも、文学の言葉、あるいは学術的な言語によって、書かれて存在することで、誰かがそれに共鳴する余地は立ち現れるだろう。